
虹を渡る船

小海 香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹を渡る船

【Nコード】

N2239P

【作者名】

小海 香

【あらすじ】

僕はどこにいたんだろう。

何を考えているんだろう。

何を感じているんだろう。

第一話 虹を渡る船（前書き）

若輩者ですが

読んでいただけると幸いです。

第一話 虹を渡る船

目の前には青い空が広がっていた。

いろいろな形をした雲が真っ白な雲が空を流れていく。

あの雲はソフトクリーム、あれは……。

そんなふう雲を目で追っているうちに視界の端にマストが映る。

ああ、僕は船の上にいるんだ。

そういえば、背中を通して暖かい木製の床を感じることができる。

ゆらりゆらりと揺れているのが分かる。

僕は床に寝転んだまま波を受けながらも果敢に進んでいる船を想像した。

遠くからは鳥の鳴き声。

そして、波の……。

おかしなことに波の音が聞こえなかった。

今日はとても波の穏やかな日なのだ。

僕はゆっくりと立ち上がった。

やっぱり何かがおかしい。

慌てて船の縁から下を覗き込む。

眼下には赤い海が見えた。

海はまっすぐな線のように細く長く伸びている。

しかもその下にはまばらに雲が見えた。

ゆっくりと船は進んでいる。

この船はどこに向かっていているのだろう。

コツ、コツ、コツ。

金属が床を叩く音がする。

後ろを振り返ると帽子を被った初老のおじいさんが立っていた。

いかにも船長と言った感じの。

わずかに口元に生えた髭がよりいっそう彼の威厳を際立たせているような気がする。

おじいさんはさっき僕がそうしたのと同様に下を覗き込んだ。

「赤か」

まるで何かに対して呆れているかのように。

「海のことですか」

僕は下を覗き込んだままのおじいさんに向かって尋ねた。

「これは海じゃあない。虹だ」

虹。

単色の虹などありえるのだろうか。

僕は一度も聞いたことがなかった。

いや。

そもそも、なぜ虹の上を船が進んでいるんだろう。

全くおかしい話じゃないか。

「虹ですか」

顔を上げたおじいさんに向かって確認するように尋ねる。

「そうだ」

そしておじいさんは服をパンパンと手ではたき、しわを伸ばした。

そして帽子を被り直した。

「ようこそ、虹を渡る船へ」

僕は眩暈がしそうだった。

虹を渡る船。

船が虹の上にあることなど想像もできない。

しかも単色の虹。

「ようこそ」

そう言つと船長らしき人は僕に向かってお辞儀をした。

つられて僕もお辞儀をしてしまう。

「この船はな」

船長らしき人は帽子を被り直し、再び下を覗き込む。

「おい。高度をもう少し下げろ」

船長が叫んでから少し経った後、がたんという音がし、ジェットコースターの降下時に味わうような浮遊感がした。

どうやらこのおじいさんは本当の船長であるようだ。

そして船長は思い出したように僕の方に向き直り話し始めた。

「この船は行くあてどない旅を続けているんだよ。私もだが」
付け加えるように船長が言った。

そして船長はゆっくりと首を横に曲げて舳先を見た。

その横顔はひどく寂しそうだっ。

「ワシはいろいろな人たちを見てきた」

そういいながら船長は船の後方の舵に向かって歩き始めた。

船長が持っている杖のコツコツという床を叩く音が再び船上に響く。僕もゆっくりとその後ろを追いかける。

やがて僕と船長は船の後方にたどり着いた。

そこには大きな、大きな舵があった。

船長は優しくその舵を撫でた。

まるで我が子の頭を撫でる親のように。

「ワシとこの船は二つで一つ。まあ、虹が七色で一つなのと同じだな」

「あの。あなたはいつからこの船に」

僕はふと思ったことを口にした。

船長がすつとこちらを睨んだような気がした。

「すみません」

僕は思わず目を伏せ、余計なことを言ってしまったと後悔した。

聞いてはいけないことであつたに違いなかった。

気まずい雰囲気になつてしまった。

僕は顔を上げることができない。

船長がどんな表情をしているかも今の僕には分からなかった。

トンと背中に手が添えられる。

そのまま手は優しく背中をさすり始める。

「どうした。気分が悪いのか」

予想に反して船長の優しい声が聞こえた。

僕はすばやく顔を上げた。

「大丈夫です」

「そうか」

そう言うと船長は手をゆつくりと引つ込めた。

手の感触を思い出す。

小さく硬い、しわのよった手だった。

その手から先ほどの答えを窺い知ることができたような気がした。

「虹は七色ですよね。でも下はただ真っ赤なだけですよ」

僕がそう言うと船長は大きな声で笑った。

「そりゃあ、虹は七色だ。でもその七色はそれぞれ固有の名前を持つている。そうだろ。君は怒り、悲しみ、喜びといったものを一括して感情と呼ぶのか。それぞれに名前がついているのか」

当たり前のことを言われて僕は少し何かを感じた。

僕は感情を静めるために赤い海を見ていた。

ドクン、ドクン。

僕の鼓動を感じる。

ドクン、ドクン。

何かを感じる。

何かがこみ上げてくるような感じ。

熱い、熱い何か。

懐かしい何か。

僕は心を落ち着けたいのに。

ドクン、ドクン。

一行に落ち着かない。

赤い海。

赤い感情。

「お前はそれをただ感情と呼んでいる。しかしそれにはれっきとした名前がある。思い出せ」

後ろから船長の低い声がする。

「思い出さなければお前は先には進めない」

何か僕を支配していく。

「さあ」

船長がそう言うと同時に僕は目を閉じた。

再び目を開けたとき僕は住宅街の狭い道路に立っていた。

第二話 赤色

帰らなければいけない。

そんな気がした。

でも、どこに帰ればよいのだろうか。

そんなことを考えているうちに自然と足が動き出す。

まるで、自分が帰る場所を知っているかのように。

あたりは真っ暗で、定間隔に設置された街灯だけが足元を照らしている。

足が急ぐ。

いつの間にか走り出していた。

時間は夜の9時を回っている。

よくあるような家の前で足が止まった。

暗いため表札が確認できない。

キイツという金属音と共に門扉が開く。

お世辞にも広いとは言えない庭。

蔓の伸びた朝顔の鉢が置かれている。

しばらく佇んでいると玄関の扉が開いた。

「遅かったじゃない。寒いから、早く入りなさい」

母親らしき人物が僕にそう促した。

特に逆らう理由もなかったのでおとなしく従った。

玄関には丁寧に揃えられた革靴が一足。

日頃からきつちりと管理されているのだろう、ぴかぴかに磨き上げられている。

それと、その傍には乱雑に脱ぎ捨てられた小さな泥だらけのスニーカー。

ありえないくらいに汚い。

「ご飯は食べるんでしょ」

まるでご飯を食べると強要するような口調。

「うん。食べるよ」

そう言いながら二階への階段を上る。

「荷物を置いたらすぐに来るのよ。勿論、手を洗ってからね」

「分かった」

「もう。いつもそう言って……」

階下でため息と遠ざかっていく足音。

階段を上りきると三つの扉が見えた。

さて、僕の部屋はどこなのだろう。

階段を上る時に何も言われなかったから僕の部屋は一階ではないはずだ。

悩んでいると手前にある二つの扉の左手側が開き、中学生ぐらいの女の子が顔を出した。

「お兄ちゃん、お帰り」

そう言い、こちらを見て微笑んだ。

「ああ、ただいま。で、僕の部屋はどこだったかなあ」
勢いで変な質問をしてしまった。

女の子が不思議そうに首をかしげた。

「一番奥の部屋じゃない。変なお兄ちゃん」

そう言いながら部屋に引っ込んだ。

そうか、一番奥の部屋か。

ゆっくりと廊下を歩くと床が小さく軋んだ。

ノブを捻り扉を開けた。

真っ暗で何も見えない。

電気のスイッチを探して壁を触る。

あった。

スイッチを入れると部屋の全貌が明らかになった。

部屋の隅に置かれた勉強机。

引き出しからいくつものプリントがはみ出している。

その右横には少し大きめの本棚。

ほとんど本が入っていない。

部屋の右手にはベランダ。

左手にはベッド。

綺麗に整えられた布団。

それぐらいかな。

ギターもなければゲーム機もない。

特に趣味をうかがい知ることの出来るようなものはほとんどなかった。

階下で母親の呼ぶ声がする。

ありきたりな返事をし、部屋に荷物を放り込んで扉を閉めた。

食卓には晩御飯が所狭しと並べられている。

とても家族四人で食べられる量ではない。

「真由美、降りてきなさい。ご飯よ」

上階から真由美の微かな返事が聞こえる。

どたどたという廊下を走る音が止み、真由美が現れた。

「量が多すぎるよ。ダイエット中なのに」

第一声がそれか。

「ダイエットなんて子供がすることじゃありません」

ごもつとも。

母親のきつめな口調で気分を害されたのか、真由美は静かに席に着いた。

いただきます、という声の方々から聞こえると全員が箸を掴んだ。しばらく沈黙の晩餐が続く。

その沈黙を断ち切るかのように父親が言った。

「順調なのか」

父親は顔を上げないが、どうやら僕に向けられた言葉のようだ。

「何が」

父親のため息。

「勉強のことだ」

勉強……。

そうか。

あの時、僕は塾からの帰り道だったのだ。
そんなことは今はどうでもいい。

僕は質問にどう答えらいいのか迷ってしまった。
無難に答えるしかないか。

「まあまあ、かな」
ガタン。

父親が食卓にビールの入ったグラスを叩きつけた。
その衝撃で中身が食卓上に飛び散った。

「ふざけているのか。お前は今まで……」

父親はそこから言葉を発することなく静かに椅子に座った。
そこからは誰も何も言わなかった。

「ごちそうさま」

箸を置き僕は立ち上がった。

父親と目が合った。

父の視線が僕に刺さった。

なぜか心がつつすらと赤みを帯びた。

「さて」

僕には気にかかっていたことがあった。

食事中ずっとそのことを考えていたのだ。

ここかな。

僕は勉強机の引き出しを開けた。

案の定大量のプリントが零れ落ちた。

汚い。

プリントを、引き出しに見合わず片付いている机上にぶちまけてい
く。

その山の中を漁っていると、目的のものが見つかった。

それは、模試の結果だった。

自分の頭の良さぐらい知っておかないと。

「ふむふむ」

これは……。

最低のEがずらりと並んでいる。

第一志望から全てE判定。

駄目だこりゃ。

僕はそれを山の上に置きベッドの上に転がった。

そういえば、僕は何をすればいいのだろう。

勉強か、ストレッチ……。

違う。

『思い出せ』

船長はそう言った。

僕は何かを思い出さなければいけない。

何を。

それが分かれば苦労しないじゃないか。

その時部屋をノックする音がした。

「弘一。入ってもいいかしら」

散らかった机が目に入った。

まあ、気にすることはないか。

「いいよ」

ノブの回る音と共に蝶番の軋む音がして扉が開いた。

母親の目は一旦机に向けられたがすぐに僕を見つめた。

「座ってもいいかしら」

「どこにでも」

そう言われると母親は勉強機の椅子を引っ張り出した。

座る時に椅子が軽く軋んだ。

「勉強の方は大丈夫なの」

父親と同じ質問。

まあまあ、なんて言える雰囲気じゃない。

母親の真剣な表情。

息子の人生の事だ。

真剣にならない親の方がおかしい。

「大丈夫だよ。心配しなくても」

優しく微笑みながら言っただつてもりだったが、母親の表情はさらに険しくなる。

「本当にそうなの」

そう言いながら母親は机の方に目をやった。
しまった。

模試の結果を出したままだったかな。

「もう一年、浪人生っていうのは無理なんだからね。お金の面でも、真由美の事もあるし」

僕は浪人生なわけだ。

「分かってるよ。がんばってるから」

何の根拠もなくそう言った。

なぜだか少し声が大きくなった。

「そう……」

小さな声で母親が呟くように言った。

ドタドタと誰かが階段を駆け上る音が聞こえる。

「弘一。母さんを困らせるんじゃない」

父親の強い口調。

何かが、赤い何かが僕の心を満たしていく。

困らせてないよ。

それは声にはならない。

心の中だけで大きく響いた。

それにしても勝手な言いがかりだ。

「あなた。やめて」

それでも父親は止まらなかった。

酒が回っているのだろうか。

母親の制止に逆らって父親は言い放った。

「お前は我が家の重荷なんだよ。通さんと母さんがどれだけ苦労しているのか知っているのか」
知らない。

知りたくもなかった。

「何だ。その顔は」

自然とそんな顔になっていたのだろうか。

「もう一年勉強すれば誰でも合格すると思っっているのか」
やめてくれ。

赤い何かが一杯になって今にも溢れ出しそうだった。

父親の顔が赤くなっている。

笑いたくもないのに表情が緩んだ。

その瞬間父親が近寄ってきた。

右手が振り上げられる。

パンという音、痛みと共に溜まっていたものが一気に溢れ出した。

「うるせえな」

その一言は効果絶大だった。

驚きを隠せない両親の表情。

静まり返った室内。

鞆を手を取った。

扉を開け部屋の外に出る。

「どこに行くの」

母親の心配そうな声。

扉を勢いよく閉めた。

扉の向こうからは何も聞こえなかった。

僕はそのまま外に出た。

体が火照っていたせいか、外気がひどく寒く感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2239p/>

虹を渡る船

2010年12月29日22時14分発行